

—レンズの向こうの子どもたち—

平成11年10月26日～11月19日

子どもの頃のことをおぼえていますか。

大人は誰でも子どもでした。

どんな時代にも子どもはいます。

子どもはいつでも素直で明るい表情を見せるわけではありません。

大人のようにつらい現実にも直面することもあるのです。

そんなありのままの姿に写真家はレンズを向けるのかもしれませんが。

今回は戦後の子どもたちの写真集を展示します。

これらの写真集の中にあの頃のあなたを探してください。

展示資料一覧

<>内は当館請求記号

1. 山端庸介

〔山端庸介〕〔撮影〕東京 岩波書店 1998.7 71p 23×23cm (日本の写真家 23)

<KC726-G1826>

並列タイトルYamahata Yosuke 年譜あり

1945(長崎)

長崎に原爆が投下されたわずか一日後に撮影されたもの。被爆地の惨状を冷静に記録している。

2. ヒロシマ 25年 写真記録

佐々木雄一郎〔写真〕東京 朝日新聞社 1970 図版282p (解説共) 26cm

<GC223-3>

1948(広島)

原爆により肉親13人を失った写真家が25年にわたりヒロシマを写し続けたもの。

3. 土門拳全集 10

東京 小学館 1985.8 211p 31cm ヒロシマ 編集：第一アートセンター

<KC726-623>

おもに図 著者の肖像あり

1957(広島)

戦後の貧困のため養育が行き届かず、盲目・下肢不自由になった双生児。「あの原爆のいわば、間接的犠牲者であると言えよう。つまり戦争と貧困という社会悪が大人にもまして子どもたちにしわ寄せされた象徴ではなかるうか。」

4. カストリ時代 昭和21年, 東京, 日本 林忠彦写真集

林忠彦〔撮影〕 吉行淳之介文

<KC726-350>

東京 朝日ソノラマ 1980.3 126,14p 27cm

1946(上野・東京)

上野の浮浪児や焼け跡の風景、バラックの店など、戦後の混乱期をリアルに記録している。

5. 歴史のおとし子 エリザベス・サンダース・ホーム 10年の歩み

沢田美喜, 影山光洋著 東京

<369.44-Sa956r>

読売新聞社 1958 図版48枚(解説共) 26cm

写真は影山光洋, 影山雅英, 影山和余

1948・49(鎌倉・神奈川)

進駐してきた戦勝国の兵士と日本の娘たちの間に生まれてきた混血児たちが暮らす、エリザベス・サンダース・ホームを愛情を持って撮り続けたもの。

6. 芋っ子ヨッチャンの一生

影山光洋著 東京 新潮社 1995.4 131p 20cm

<KC726-E2286>

(フォトミュゼ) おもに図 影山光洋年譜 : p131

1949(江ノ島・神奈川)

写真家・影山光洋が撮り続けた家族の記録。写真は5歳で亡くなった三男・賀彦。

7. 熊谷元一写真全集 第2巻(戦後編1)

松本 郷土出版社 1994.4 204p 26×26cm 付：熊谷元一略歴

<KC726-E1696>

1957(会地村・長野)

駐村研究員として、昭和20年代から30年代の村の婦人や子どもの生活を撮影した記録写真。

8. 童暦

植田正治〔撮影〕 東京 中央公論社 1971 1冊(頁付なし) 26cm <KC726-65>
(映像の現代 3)

1955(松江・島根)

山陰の風景と子どもたちが季節ごとの章にわけられている。

9. 子どもの領分 フォト・エッセイ

藺部澄〔撮影〕 林えり子文 京都 淡交社 1996.5 125p 26cm<KC726-G413>

左 1955(小豆島・香川)

右 1954(桜島・鹿児島)

「子ども時代への郷愁にかられて撮ったのであろう」写真集。

「働かざる者食うべからず」という時代であり、昔の子どもはよく働いた。

10. 砂丘・子供の四季

植田正治著 東京 朝日ソノラマ 1978.4 1冊(頁付なし) 21×22cm

(ソノラマ写真選書 11) おもに図

<KC726-246>

1949(鳥取)

「へのへのもへの」。砂丘を舞台にした作品で高い評価をうけている。

11. 山梨ふるさとの残像 中山梅三写真集

中山梅三著 甲府 山梨日日新聞社 1993.12 160p 27cm 写歴・略歴 : p159~
160

<KC726-E1925>

1950頃(山梨)

昭和30年頃の農村生活の日常を撮影している。『子どもの四季』の章には「子どもは貧しい暮らしの時代ほど生き生きしていたように見えた」とある。

12. 思い出の街

井上孝治〔撮影〕 東京 河出書房新社 1989.8 1冊(頁付なし) 27cm<KC726-E313>

左 1955(平戸・長崎)

右 1956(春日・福岡)

作者のカメラは「人間の目そのもの」のようだ。写真左はお使いに行く子ども。当時、酒や醤油は量り売りだった。右は自転車乗りの練習をする子ども。子供用自転車は贅沢品だった。

13. イガ栗、おてんば、ガキ大将 思い出写真館
臼井薫著 名古屋 郷土出版社 1993.10 157p 21cm <KC726-E1579>
左 1955(愛知)
右 1957(愛知)
作者は土門拳の影響を受けて、リアリズム理論のもとに子どもを撮影した。
写真は駄菓子屋の店先。ポスターに当時の風俗がしのばれる。
14. 木村伊兵衛写真全集昭和時代 第3巻
東京 筑摩書房 1984.7 199p 31cm 昭和三十年～四十九年 <KC726-679>
1958(東日暮里・東京)
ライカによるスナップショットの名手といわれ、東京の下町を好んで写した。
15. ある日ある所
石元泰博著 東京 芸美出版社 1958 図版78枚 29cm <748-I649a>
1953～58(神田・東京)
三部構成の写真集。開いてあるページは第三部の「こども LITTLE ONE」。
1950年代の東京の下町を中心に撮影されている。
16. 筑豊のこどもたち 土門拳写真集
土門拳著 東京 パトリア書店 1960 図版95p(解説共) 26cm <748-D96t>
1959(福岡)
17. 筑豊のこどもたち 土門拳写真集 続
土門拳著 東京 研光社 1960 図版95p(解説共) 26cm <748-D96t>
るみえちゃんはお父さんが死んだ
1960(福岡)
16、17ともにザラ紙に印刷された百円写真集。
日本を代表する写真家である土門拳が、当時大きな社会問題であった炭坑の閉山を取り巻く複雑な社会状況を「子どもたち」に焦点を絞って表現したもの。
18. ドリームエイジ
長野重一著 東京 朝日ソノラマ 1978.3 1冊(頁付なし) 21×22cm
(ソノラマ写真選書 10) <KC726-242>
左 1965(大久保・東京)
右 1961(高島平・東京)
急激に変貌した60年代、その軌跡をとらえた写真集。左右ともに、団地で暮らす子ども。

19. 時代の記憶 1945-1995 長野重一写真集

長野重一著 東京 朝日新聞社 1995.7 143p 28cm <KC726-E2365>

左 1964(東京)

右 1966(東京)

作者が生きてきた時代の「記憶の断片」をあつめた写真集。

左 お受験のための進学塾で学ぶ幼稚園児。

右 陸橋下の公園で遊ぶ子ども。

20. さっちゃん

荒木経惟著 東京 新潮社 1994.11 1冊(頁付なし) 20cm (フォトミュゼ)

<KC726-E2047>

1962~63(荒川区・東京)

1964年、第1回太陽賞受賞作品を含む写真集。

写真は三河島の都営アパートに住む少年・さっちゃんとその仲間たち。セーターの袖口が鼻水でコチコチになっている昔懐かしいガキ大将。作者は彼らに溶け込んでいるため、カメラと子どもたちの「息がぴったり合っている」。

21. 子どものなかの子どもの話 石亀泰郎写真集

石亀泰郎著 東京 三笠書房 1972 175p 24cm <KC726-126>

1972頃(撮影場所不明)

作者は「人間にとって大切な子ども時代」をみつめた。

22. 水俣 写真集

W.ユージン・スミス、アイリーン・M.スミス著 中尾ハジメ訳 東京 三一書房

1982.2 192p 30cm <KC726-474>

普及版 水俣病関係年譜 : p178~183 参考文献 : p192 Minamata.の翻訳

1975(水俣・熊本)

1972年から75年にかけて熊本県水俣市に住み、水俣病の患者さん達を撮影した。

写真は胎児性水俣病患者であるしのぶちゃん。

23. 東京長日

桑原甲子雄写真集 桑原甲子雄写真 東京 朝日ソノラマ 1978.11

図版92p 21×22cm (ソノラマ写真選書 15) <KC726-265>

1976(世田谷・東京)

「生活者の視線」で撮影された写真集。

24. 子どもたちの四季 英伸三写真集

英伸三写真 丸木政臣文 東京 三省堂 1979.7 175p 27cm <KC726-307>

1976(白浜町・千葉)

「四季おりおりの子どもたちの姿」。写真は「緊張でこちこちの」入学式。

25. 自然を履く子どもたち 写真集／はだしの学校

西村満著 東京 六興出版 1989.4 159p 22cm <FC33-E25>

1985 頃(白河市・福島)

はだしで学校生活を送る子どもたちの写真集。写真は、はだし生活一日目の入学式。

26. 上野駅の幕間 本橋成一写真集

本橋成一著 東京 現代書館 1983.7 175p 26cm <KC726-652>

構成：土本典昭 わたしの上野駅百年：p161～171

1983 頃(上野駅・東京)

上野駅に関わる人々を空間のなかで捉えた写真集。

子どもにとって、迷子は大事件である。この経験は「忘れられぬ駅の記憶」となるのだろう。

27. 東京好日 長野重一写真集

長野重一著 東京 平凡社 1995.11 104p 23×29cm <KC726-G163>

1994(永田町・東京)

「時代の気分を捉えた」写真集。写真は地下鉄の駅で通学する小学生。

28. 幼年の「時間」

牛腸茂雄著 東京 Mole 1995.2 1冊(頁付なし) 21×23cm おもに図

<KC726-G628>

1983 頃

「子どもの「時間」体験は「いのち」そのものだから、その拡がりや脹らみや深さにおいて、目を見張るものがある。」

29. Self and others

牛腸茂雄著 東京 未来社 1994.6 114p 21×23cm <KC726-E1870>

監修：飯沢耕太郎、津田基 おもに図 年譜：p112～113

1975 頃(座間・神奈川)

幼い頃に生死の境をさまよい肉体にハンディキャップを背負いながらも36歳までに3冊の写真集を出版した。初期から一貫して暖かい視線で子どもたちを撮影し、静かだが力強い独自の世界が

ひろがっている。

牛腸茂雄については Déjà-vu (z11-2154)の No.8 で特集されています。

あの頃のあなたは見つかりましたか？

子どもである時間は一瞬です。写真にはその一瞬が記録されます。

幸せな笑顔をみせる子どもはもちろんですが、たった一人でそこにたたずんでいる子どもにも確かに写真家の心をとらえる不思議な魅力があるのではないのでしょうか。

「子どもたちが凝視の一瞬のあと、こちらに近づいてくるのか、向こうへ去ってしまうのかは、おそらく誰にもわからない。」

—『こどもたちはまだ遠くにいる』川本三郎編(KC726-E1278)より—

国立国会図書館 03-3581-2331(代)

ホームページアドレス <http://www.ndl.go.jp>

■国立国会図書館 ■□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□■03(3581)2331■